

人とももの、大いなるものが共鳴する

日本の伝統文化を伝えたい

横尾 靖

写真 矢作常明



横尾さん監修による、数枚の屏風を使った組み立て式の茶室

掛け軸や屏風の仕立て・修復を行う株式会社マスマスミ東京・代表の横尾靖さんは、日本の伝統文化を守り伝えるべく、表装や陶芸、日本画、篠笛、古代文字などさまざまな講座を開催する「マスマスミ道場」を運営している。そうした太古の昔から紡がれる日本文化の中には、スピリチュアリティが息づいている。横尾さんがプロデュースした茶室屏風の中で話を聞いた。

時間が経つほど
味わい深くなる

——これが茶室屏風（写真）ですか。

横尾 ええ。壁面は5枚折りの屏風1双（半双×2）を組み合わせてあります。この壁は14層の和紙でできています。紙作りでいちばん難しいのは、原料のコウゾという植物を栽培することなんです。台風で不作になることもあるし、一定のよいものを採るのが難しい。紙漉きは
——栽培するところから始める

んですね。

横尾 そうです。日本のもの作りは、時間のかけ方が全然違います。たとえば、掛け軸などに使う澱粉のりは、毎年、大寒の

時に作って30年置くんですよ。

——30年ですか。

横尾 それくらい経たないと使えないのりがあるんです。3年もの、5年ものをブレンドする



折りたたみ式 茶室屏風

14層の和紙が使われた壁面は5枚折り屏風1双（半双×2）、天井は2枚折りの半双と1枚の屏風からなる。広さは3畳、組立て時は縦180×横230×高さ190センチメートル。収納時は縦100×横190×厚さ12センチメートルで3つのケースに収納（写真は組立て時の様子）。横尾さんが設計し、4人の職人によって制作された。貸出も行っている（有料）。最初に和紙の屏風で茶室を作ったのは、200年以上前、本願寺第十八代宗文如上人（1744～1796年）。



茶室の中には、書の掛け軸と花一輪。「一輪の花を、真心込めて、今日いらっしゃる方を思っ
て生ける。その心があるから、気持ちが良いと感じるんですね。高級な花でなければいけな
いとか、有名な器だからいいとか、そういうものではないんですね」(横尾さん)

こともありますが、古いものを
修繕する時は30年ものですね。
現在、そうしたのりを作ってい
る人はごくわずか。いまは文化
財の修復でさえも、それに代わ
る別ののりを使うこともありま
すが、昔と同じ方法でないと、1
00年、1000年もつかどう
かわからない。日本人は、そう
やって長い間、文化を紡いでき
ました。文化がどうだこうだ、と
言う前に、先人がやってきたこ

とを見れば明らかなんです。
——そうですね。この茶室も、
昔ながらの技術で作られている
んですね。
横尾 はい。この茶室屏風は4
人の職人が手がけました。材料
はすべて天然のもので。たと
えば和紙は、コウゾを栽培して、
木槌で叩いて、木の灰で煮ます。
自然のものを使って、人が時間
をかけて手で作っている。そう
いうものがそばにあると、とて

も気持ちがいいんですね。
人が丹念に手をかけたものは、
よい波動を記憶します。この部
屋は、普段は座禅の会やヨガな
ど、さまざまな催しを行ってい
るのですが、参加するみなさん
が心地よさを感じてくれれば、そ
の思いが和紙や木に残る。この
空間は、そうやってどんどん進
化しているんです。見る人の波
動で、アートもどんどん変わ
ります。特に書画は、見るたびに
違う形をしていますよ。みんな
粒子でできていますから。
——共鳴するわけですね。
横尾 そう。本物というのは、時
間が経てば経つほどよくなりま
す。たとえば和紙は、漉いた直
後は、赤ん坊のように頼りない
んです。いまは紙を寝かせない
ですぐに使いますが、赤ん坊と
いっしょですから、弱くてずれ
やすい。それが、3年、5年、10
年と寝かせていくと、すごく締
まってくるんです。大人になっ
て、しっかりした紙になるんで
すね。いま、世の中にあふれて
いる物は、作った時がいちばん
よくて、何年かしたら壊れる。壊
れたら捨ててしまう。でも昔の

人は、必ず修繕して残します。そ
れが、時間が経つほどに味わい
になっていくんですね。
**アートとして表出する
自分を超えた何か**
——昔の日本人は、ものに命を
感じながら生きていたんでしょ
うね。
横尾 そうなんです。たとえば
僕は、とある竹笛をもっている
んですが、その笛は、囲炉裏が
ある家の天井で、100年間、ス
モークされた竹でできています。
最初はまったく音が出なくて、
いまでも、音が出にくいことも
ある。でも、それがいいんです。
笛と出合って3年ほどですが、
音を出そうと思うと、出ない。心
がゆるんで、深く沈んでくると、
何とも言えない音が出るんです
ね。まだまだ、子どもの音です
が、10年、20年経てば音が変わっ
ていくと思います。たとえ吹か
なくても、いつももち歩いて、少
しずつ付き合っているんです。
いまの時代、楽器は人に聞か
せるために吹く、というイメー
ジがありますが、僕は笛吹きで
はありません。自分を鎮めたり、



横尾 靖

Yasushi Yokoo

株式会社マスミ東京 代表取締役。表装家。一般社団法人文化遺産調査研究保存継承機構ゆらび 理事。日本の伝統文化を体感できる場として「マスミ道場」(東京都豊島区)も運営。表装、金銀箔、和綴じ、陶芸、書、日本画、篆刻、篠笛、裂地などを楽しむ講座のほか、いろは呼吸書法、ホツマツタエ、陳式太極拳などの教室も開催。シヨールームやギャラリースペースもある。

<http://www.masumi-j.com>

茶室屏風の中で、竹笛を奏でる。「一節切」という幻の竹笛で、尺八の原型と言われる笛だ。一休禅師が好んで吹いたとも伝えられる。「音と音の間で、遊ぶんです」と横尾さん。場の善し悪しによって、音の出方も違うという

何かとつながるといふ意味で、笛と付き合っていますね。
——横尾さんは、アートをどのようにとらえていますか。
横尾 たとえば、職人が繰り返し紙漉きをするとか、表具のりを溶く時、空っぽになって、無心でやるんですね。身体が覚えているんですよ。そうすると、自我がないところで、自分の意志ではない何か働いている。昔の美術品にしても、仏像にしても、神々しく見えるというのは

本当だと思えます。自分ではない、大元の何かからいたしたいものが、人間の手を介して出現する。これがアートではないでしょうか。だからこそ、人に感動や共感、一体感のようなものを感ぜさせるのでしょうか。
誰もが、そうしたアートを感ぜることができません。でも、現代は物や情報があまりにも多すぎて、感覚がにぶってしましますね。だからこそ私たちは、和の文化を体験できる講座を開催

し、伝統的な技術を一般の方にも伝えていきます。

ヨシテ文字で書かれたホツマツタエ

——たとえば、どんな講座がありますか。

横尾 ホツマツタエという縄文時代の古代史も面白いですよ。日本には、漢字が伝来する前から、ヨシテ文字というのが存在したらしいのです。ヨシテ文字は全部で48文字あり、「○」は宇宙を表すなど、それぞれの文字の構成要素に意味があります。ホツマツタエでは、天照大神が実在の人物で、男性であったなど、興味深い内容が記されています。それが本当かどうかは別にしても、ロマンがありますよね。

そのほか、表装や陶芸などさまざまなです。自分で作ると、買ったものより、もっと深くものとかかわるようになります。ものとのコミュニケーションが始まるんです。作られたものを見る目も変わってきますよ。そうしたことを感じられるようになると、自分がとても満たされる



手前の石は、横尾さんが海岸で出合ったという石笛。最初から穴が空いていたという。左奥は横尾さんが手作りした焼き物の笛。「山中で吹くと木がざわめき、風が吹き始めるんです」(横尾さん)

ます。ものと深く付き合っていくと、それがただで嬉しさを感じる。人との付き合いも同じですね。そういう喜びや豊かさを知ったからには、伝えたいわけにはいかない。これからも和の輪を広げていきます。

infomation

- ◆ 伝統織物で数寄屋袋をつくる2日間コース
日程：8月23日(土)、30日(土)
場所：マスミ本社1F
参加費：8,400円(税別)／コース(要予約)
- ◆ 第20回仲間の作品展(入場無料)
日程：9月30日(火)～10月4日(土)
場所：マスミギャラリー
マスミ道場で共に学んでいる人々の作品展。
※お問い合わせ マスミ東京
TEL:03-3918-5401 e-mail:info@masumi-j.com